

# 歴史授業についての一考察

## －哲学的視点を通して－

武庫川女子大学附属中学校・高等学校 藤井 一 亮

### はじめに

長年にわたり高等学校においてかつての社会科や地理歴史科・公民科の教師として種々の科目を担当してきた。以下の小論は、そのうちの日本史・世界史の授業を行ってきたことを基礎に述べたものである。最初に、筆者が教室に臨むその時々原則としたものについて述べる。二番目は、一つの単元を、深めてみた点である。教師は、教科書には二三行しか記述されていない内容に対しても、その背景を一層深めねばならない。つまり、その単元を扱うことの意味について教師自身が明確な考えを持っていなくてはならない。授業での教師の問題提起である説明や発問は、生徒の活気ある学習の契機となる。この観点から、当該の単元の吟味が必要なのである。そうでないならば、授業が非常に薄っぺらな、単層的、通俗的、結論押しつけ的なものになってしまう。その記述されているテーマについて、どのような見方や解釈ができるのか、若干の提起を行った。もちろん、それをそのまま教えればよいというものではない。1960年代後半より教壇に立ち、その時以来、良き授業づくりに悩み、苦闘し、いまだ、道、遠しの感を抱いている。

歴史授業の考察をその個人の遍歴から語るとは、考察ではなく、私事だというふうに、客観主義や科学主義の立場から批判があるかもしれない。しかし、授業を考えるということは、自分自身の生身の経験をそこに投げ込むよりほかに方法がないのではないかと考える。デカルトの言う、自分のたどってきた道を一枚の絵のように描いて、それを他者に判断してもらうことも自分を教育することになる、という方法は、時を隔ててもなお私を励ましてくれるのである。

### 1 歴史の授業構想の基礎に据えるもの

#### (1) 歴史学習における問題の発端

いつの時代も歴史の教科書は分厚く、ページごとに新たに登場するあの膨大で複雑な史実の量はある意味では荒れ狂う洪水のごとくである。「歴史は覚えることつまり暗記することではない、考えることなのだ」と自分は高校時代に教わったものだ。私も生徒に、歴史の学習で大切なことは、テストの虫食いの空欄に入る事象を単に覚えることではなくて、よく考えることだと述べながら授業をしていた。とはいっても、多くの生徒にとっては、教科書の諸事象を覚えなければならなかった。積極的に学ぼうとする勇気がなければ、途方にくれるところである。ある評論家は、彼が学校

で受けてき歴史教育を省みて、自分はいつべんでも歴史が面白いものだと思われたことはない、自分たちは歴史という代わりに暗記物という言葉を使っていた。学校での歴史教育には、恨みこそあれ、感謝の念など毛頭ない、と断じているのである。多くの人々の喝さいが聞こえてきそうである。確かに、暗記中心で教科書通りであるだけの授業は退屈で魅力に欠け、歴史嫌いを生み出す大きな原因となっている。そこで私は、歴史的思考力をつけるとは何か、また歴史において理解されるべきことは何か、生徒の記憶力に負担をかけるだけではなく、論理を追いながらおもしろく理解できないものか等について、自分なりに考えなければならなかった。言い換えれば、何か原理・原則にしたがって、糸を手繰るように、つまり一本の筋の通ったものにより、歴史を見ることができないものかと考えたのである。この発想はデカルトの「一つの原理よりすべてを導き出す」という命題の影響を強くうけたものである。彼はまた、記憶すべき歴史上の出来事は精神を奮い立たせるし、また思慮をもって眺めると判断力を育てるものとなると述べている。このような興味深い歴史の授業をどのように構築するか、これが小論の問題の発端である。

## (2) 自由を求める精神の自己展開としての歴史

そこで、私はヘーゲルの「歴史哲学講義」を自分の授業の下敷きにしようと考えたのである。なぜ歴史家ではなく哲学者ヘーゲルであるのか、この疑問に答えておきたい。歴史上、ソクラテスの裁判とその死刑の判決は周知のことである。それに関して、多くの人々は、ソクラテスの傑出さ、倫理思想の確かさを説くために、当時のアテナイ市民の水準が、衆愚政治にも陥っていたとし、日当めあての500人の裁判官の低劣さをあげつらうのである。(因みに、近々始まる裁判員制度にも日当は付いているのである。)しかし、ヘーゲルはその著「哲学史」の中で、ソクラテスの偉大さ、よく生きるために死ぬ倫理の高潔さを讃えると共に、あの判決を下さなければならなかったアテナイ市民が決してレベルの低いものではなかったと評価し、あの一連の裁判と判決と刑死という事件が時代の悲劇であったと見ているのである。しかもこの悲劇は正真正銘の悲劇である。それは一つの正義がもう一つの正義とぶつかり合う普遍的倫理的な悲劇である。一方が正義であって、他方が不正義である、換言すれば、暴君と無実の人間が登場する月並みな芝居というようなものではないとも言う。ヘーゲルの歴史を見る目の確かさを私は感じたのである。

ヘーゲルは言う「世界史の本体は精神であり、精神の発展過程です。」<sup>(1)</sup>「精神は自由だ、という定義にしたがえば、世界の歴史とは、精神が本来の自己をしだい正確に知っていく過程を叙述するものだ、ということができる。そして、萌芽のうちに樹木の全性質や果実の味と形が含まれるように精神の最初の一步のうちに、歴史の全体が潜在的に含まれます。」<sup>(2)</sup>と。つまり、世界史とは、精神の発展段階を叙述するものである。では、その発展の動因となるものは何か。ヘーゲルはまた言う「東洋人は、精神そのもの、あるいは人間そのものが、それ自体で自由であることを知らない。自由であることを知らないから、自由ではないのです。彼らはひとりが自由であることを知るだけです。が、ひとりだけの自由とは、恣意と激情と愚鈍な情熱にほかならず、ときにおとなしくおだやかな情熱であることもあるが、それも気質の気まぐれか恣意にすぎません。だから、このひとは専制君主であるほかはなく、自由な人間ではありません。ギリシア人において、はじめて自由の意識が登場してくるので、だから、ギリシア人は自由です。しかし、彼らは、ローマ人と同様、

特定の人間が自由であることを知っていただけて、人間そのものが自由であることは知らなかった。・・・ゲルマン国家の受け入れたキリスト教においてはじめて、人間そのものが自由であり、精神の自由こそが人間のもっとも固有の本性をなすことが意識されました。』<sup>(3)</sup>と。要するに、世界史とは自由の意識が前進していく過程であり、この進歩をその必然性において認識するのが、われわれの任務であるというのである。

まさに、ヨーロッパ中心の史観であり、その部分に関しては、当時も今も反発を禁じ得ない。しかし、一つの原則、つまり、自由の意識、換言すれば、人々の自由への願望が世界史を動かしてきたという発想は、デカルトの出発点を求めている私を十分に惹き付けたのであった。

そのうえ、歴史上の個人の栄枯盛衰、社会の有為転変もヘーゲルはうまく説明しているように思えたのである。すなわち、「世界史的個人は世界精神の事業遂行者たる使命を帯びていますが、彼らの運命に目を向けると、それはけっして幸せなものとはいえない。彼は穏やかな満足を得ることがなく、生涯が労働と辛苦の連なりであり、内面は情熱が吹き荒れている。目的が実現されると、豆のさやにすぎない彼らは地面に落ちてしまう。アレキサンダー大王は早死にしたし、カエサルは殺されたし、ナポレオンはセント・ヘレナ島へ移送された。』<sup>(4)</sup>と。世界史の一般理念は偉大な個人の情熱を抜きには考えられないけれども、個人が決定するのではなく、それらはしのぎを削りながらも、その一部は没落していくのである。「対立抗争の場に踏みとどまって危険を冒すのは、一般理念ではない。一般理念は無傷の傍観者として背後にひかえているのである」。<sup>(5)</sup>つまり、世界史の一般理念は、情熱をもって苦闘し続けた偉大な個人を傍観し、彼らが損害や被害を受けても、また没落しても何食わぬ顔をして平然としているのである。ヘーゲルは人間たちにこのような展開をさせる理性をまさに、「理性の策略」つまり理性のずる賢さと呼んだのである。

世界史を「自由の発展」とみ、そして、個人を超えて進むものであるというイメージは、当時の私の授業に臨む態度に大いに役立ったように思われる。イギリス市民革命もフランス革命も、またアメリカ独立革命も、これで、快刀乱麻を断つがごとく、授業の組立ができると感じたものであった。

ところが、よくよく考えてみると、アジアを度外視した世界史がありうるだろうかと思いはじめた。ヘーゲルは、中国とインドとは本当の意味では、まだ世界史の圏外である、なぜなら、ここでは、変化というものが一切なく、いつまでも同一のものの繰り返しであり、そこには、停滞性が支配的であるからだ、と言っている。この議論は、独自の文明と歴史・伝統を有しているアジアを正當に評価していない。それゆえ、ヘーゲルの史観が授業をやる上での原理・原則、そして統一性として成立するかということに、たとえ彼が19世紀までの歴史しか知っておらず、当時の学的水準に支配されていたことを割り引いても、なお疑問を感じさせるものであった。

しかし、当時、私は、歴史を統一性のある実体と考え、これを一本の筋のもとに教えたいと思っていたのである。

### (3) 社会的矛盾による歴史の展開

ヘーゲルの次に会ったのがマルクスであった。彼は、歴史をヘーゲルのように精神の自己展開としてみるのではなく、社会を大きく二つの階級に分け、その二つの階級の争いとして全歴史を解釈するのである。自由民と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方と職人、要するに支配す

る者とされる者とが公然とであるか、または暗々裏に戦ってきた、そして、革命的な社会改造になるか、そうでなければ、相闘う二つの階級の共倒れ終わるか、二つに一つというのである。ギリシア、ローマそして西欧中世の歴史を数行で断じる痛快さは、今でも思い出せる。それから、「経済学批判」で述べられた史観にも興味を持った。人間は自らの生活の社会的生産において、物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産関係に入る。しかし、社会の物質的生産諸力は徐々に向上発展していくが、その発展の段階でそれまでの生産関係、あるいは所有関係と矛盾するようになる。世界史や日本史に登場するギルドや座の歴史的意味を生徒に考えさせるときや経済史における保護貿易主義や自由貿易主義をテーマにすると、実に見事な説明になる。そして、そのとき、そのときに、社会の変革の時期が始まるとする思想は、人間の歴史を自然法則のように必然と見るものであり、その限り一本の筋として首尾一貫しているように見えるのである。子供の成長が早晩、彼の服に合わなくなっていくようなものだとする、いわゆる矛盾が歴史を動かしていく動因であるという思想は、興味深いものと思われたのである。

この矛盾・対立が歴史を動かしていくとのイメージと、地域教材を取り上げることの重要性を、連動させる中で、私は当時勤務していた淡路島で起こった「縄騒動」といわれる百姓一揆の授業を行った。洲本市の街中にある神社の、本来は二基一対になっているはずの石灯籠が、実際には一基しかないことの原因を探ることから授業を展開したのであった。二ヶ年にわたって、一基ずつ寄付する予定をしていた豪商が一揆のあおりをくって、取り潰しにあったので、一基しか残っていない、というよりは二基目が寄進されなかったのがあった。そして、また、明治時代になって自由民権運動に奔走した板垣退助がこの一揆の指導者たちを顕彰した石碑が、一揆の拠点となった郡部の神社にあることもわかった。生徒の興味関心も高く所期の目的を果たせたのではないかと思われた。

しかし、悠久の歴史すべてが、理論・法則に従い発展するとか、一定の発展段階を踏みながら規則的に進むといった、とかく人間不在となることに、私は徐々に違和感を覚えるようになっていった。別言すれば、歴史事象の多様性の中から、与えられた史観の説明にとって、好都合なものだけをつまみ食いしているようにも感じられたのである。

#### (4) 現在の目を通しての過去

ある時、私は歴史学者の奈良本達也の講演を聞く機会に恵まれた。「自分はマニファクチュア論をよくやったものだが、日本の近代化を考えるとマニファクチュアなしに一気に大工業へ行く可能性が幕末にあった。また、明治維新およびその後の流れも、決して必然ではなく、その当時、とりうる選択肢は複数であった。」と明治の群像を紹介しながら説得的に話されたのであった。彼の考え方は、「もしも」という言葉は歴史学には、使ってはならないとされているが、それを使うことによって、歴史のちがった可能性が開かれ、歴史への反省につながる、と私には解釈できたのである。

その同じころ、私は小林秀雄の「歴史は決して二度と繰り返しはしない。だからこそ、僕らは過去を惜しむのである。歴史とは、人類の巨大な恨みに似ている。歴史を貫く筋金は、僕らの哀惜の念というものであって、決して因果の鎖というようなものではないと思う。それは、たとえば子どもに死なれた母親は、子供の死という歴史的事実に対し、どういう風な態度をとるか、を考えてみ

れば明らかなことでしょう。母親にとって、歴史的事実とは、子供の死という出来事が、幾時、何処で、どういう原因で、どんな条件のもとに起こったかという、単にそれだけのものではあるまい。かけがえのない命が、取り返しがつかず失われてしまったという感情が伴わねば、歴史的事実としての意味を生じはすまい」<sup>(6)</sup>という一文に出会った。つまり、母親にとって、「子供の死」よりも「死んだ子供」のほうが歴史的事実である。実証的な事実の集積は歴史にはならない、と彼は言うのである。彼は文学者である。文章は、半ば謎めいて、そして魅惑的である。この文章に接したとき、イタリアのクローチェの「すべての真の歴史は現代の歴史である」<sup>(7)</sup>という命題を想起したのである。彼は、「現代の歴史が直接に生から発したものであるとするならば、過去の歴史と通称せられている種類の歴史もまた同様に生から直接に成立するものである。なぜならば現在の生の関心のみこそが人を動かして過去の事実を知ろうとさせることができるということは明らかである。したがってこの過去の事実、それが現在の生の関心と一致結合される限りにおいて、過去の関心ではなく現在の関心に答えるのである。」<sup>(8)</sup>と語る。彼にとっての歴史は、我々が、実証的・歴史的な事実にかかわりを持ち、現代の関心で解釈・構築するものである。私には、彼の主張は、物理的な時間の流れにおいて、過去はそれ自体存在したのであるにしても、その過去を意義あるものとして、現在からとらえようとする歴史にとって、過去は我々のために存在するものである、と思われたのであった。

奈良本達也の、歴史は必ずしも順序を追っての法則的發展ではないとする見解や、小林秀雄の芸術的直観にも似た見解、さらに、クローチェの、すべての歴史は現代史であるとする思想は、私が歴史の授業に臨む態度として求めてきた、歴史には統一した原理・原則が存在すること、そして社会発展は合理性を持ち、歴史は必然であるとする考え方に、それだけでは巨大な数の人間と長大な時間における人間の生の営みは説明しきれないのであるということを、現在ではある意味では当然であるとされることを教えたのであった。

## 2 具体的な授業内容とその吟味

### (1) 問題の所在

先にも述べたように、ヘーゲルは、自由の意識というものは、限定的であってもギリシア人の中にはじめて現れた。それゆえにギリシア人は自由であった、と語っている。大方の人たちはこの言明に異を唱えることはあるまい。高等学校の多くの教科書を見ても、つい最近まで、次のよう書かれていたものである。ペルシア戦争の結果、アテネは兵船の漕ぎ手となって働いた無産市民の発言権が増大し、民主化が徹底した。また、この戦いは、東方の専制王政に対する西洋の自由の防衛と勝利を意味し、その歴史的意義は大きい。ギリシア側が敗れていたならば、ギリシアの古典文化は今見るような形ではありえなかったのであろう云々、と。まさにギリシア礼賛文である。現在の教科書には、ここまでのトーンの高さはないまでも、やはり、この戦争はポリスの自由がオリエントの専制に勝ったと、ギリシア人は誇り、自信を深めたのである、といった類の表現が少なくない。ペルシア戦争自体、東方の専制対ギリシアの自由という側面がないとは言えないが、ギリシアとペルシアの関係がこのことのみで考えるならば、あまりにも一方的なヨーロッパ中心の見方に陥って

しまうのである。

また、一方、アテナイが、農民を中心とする重装歩兵を主力としながらも、エーゲ海を超えて黒海方面との通商にも関心を寄せており、また当時ペルシア支配下にあったイオニア諸市が反乱を起こしたときも兵船を送って援助していることを見れば、ペルシアとアテナイを中心とするギリシアの数十年を要する戦いは、本質的にはエーゲ海の制海権をめぐるペルシアとアテナイの帝国主義戦争以外の何ものでもなかった、との見方もある。後のアテナイの帝国主義的政策をみると、他の弱小ポリスにとっては、ペルシアのくびきからアテナイのくびきへと変わっただけである、と言える。しかし、この論のこう断じる側面はあるにしても、あまりにも図式的解釈にすぎるとはいえないだろうか。

ここに至るまでのギリシア・アテナイの変容を概観することも、この本質を見るためには必要なことではないだろうか。

## (2) 民主主義の起源とその内容

民主主義という概念に対して、我々は、ア・プリオリつまり先験的に何かよきものとか、また人類普遍の原理というような絶対的な価値を付与している。現行の学習指導要領地理歴史科の目標の中にも、「国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」<sup>(9)</sup>との文言を見ることができる。特に、「民主的、平和的」とは国家・社会が維持・発展させるべき価値の基準であるというふうに解説にも書かれている。

周知のように、この概念の源となったのは、ギリシアのデーモクラティア、すなわち民衆の権力・支配という語である。つまりこれは一つの政治制度であって、経済、社会、文化等すべての価値を一元的に表現するものではなかった。アテナイの内実を見ると、家庭生活などを見ても、当時の他の地域同様きわめて家父長的なのである。したがって、民主制はデーモス、つまり民衆による自治、最終決定のありようを示しただけのものである。アテナイはペルシア戦争後、デロス同盟の盟主の地位に就くが、長期的にみるならば、アテナイは徐々に変質していく。自治、自衛、自足を基礎とした体制が繁栄の中にかえって揺らぎだすのである。

このような状況のもとで、アテナイ側とスパルタ側が衝突し、二十七年にもわたるペロポネソス戦争が起こったのである。この戦争は侵略と支配の戦争であるといえよう。アテナイは、各ポリスの独立を守り、自由のために戦うと言いながら、勝利を得るや否や、解放されたばかりの国々を自らの支配下におくのである。この戦争は、それぞれの国内において、市民たちを相反目させ、内乱と裏切りを日常的なものにした。その上に、もう一つの特徴をあげるならば、その許しがたい残酷さである。当時の国際法も様々な取り決めも全くなきがごとくである。恐怖心が恐怖心をあおり、虐殺が虐殺を呼んでいるのである。

## (3) アテナイ民主制の二面性

アテナイの民主制を最高段階にまで引き上げたと考えられるペリクレスは、自国の内部については、「われらの政体は他国の制度を追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをして、わが範を習わしめるものである。その名は、少数者の独裁を排し多数者の公平を守ることを

旨として、民主政治と呼ばれる。わが国においては、個人間に紛争が生ずれば、法律の定めによって、すべての人に平等な発言が認められる。だが、一個人が才能の秀でていることが世にわかれば、無差別平等の理を排し、世人の認めるその人の能力に応じて、公の高い地位を授けられる。また、たとえ貧窮に身を起こそうともポリスに益をなす力をもつ人ならば、貧ゆえに道を閉ざされることはない<sup>(10)</sup>と述べて、現代の民主政治にも通じる理念を提起している。その同じペリクレスが、戦争遂行において、換言すれば、帝国主義戦争を前にしては、次のように語るのである、「諸君は諸君全部の、誇りであり喜びである覇者アテナイの榮譽を守らなければならない。戦いの重圧から逃れるか、覇者の栄光を逃すか、二つに一つである。考え違いをしてはならぬ、われらは、ただ、自由か隷属か、ただそれだけを争っているのではない。支配者の座を追われれば、支配者たりし間に人々からかった恨みをあがなう危険にさらされる。諸君は支配者の座から降りることはもうできないと覚悟せねばならぬ。今になって、その因果を恐れて、静かな善人に態度を改めたところでもう遅い。なぜなら、諸君は同盟独裁者の地位について久しい。この位を手に入れたことが、よしんば、正義に反すると、これを手放すことは身の破滅にひとしいからだ。手を引きたがる者どもが、もし、諸君らを説き伏せれば、たちまち我がポリスは崩壊するに違いない。いや、そのような臆病の群れは、どこに己の国を建てようと、たちまち自由を失ってしまうにちがいない。なぜなら、事なかれを望むものは、つねに強者の保護なくしてはたちゆかぬ。そのような者は、奴隷の国では安全たりえよう、だが支配権の主たるポリスには毫も益するところがない<sup>(11)</sup>と。正義の一片のかけらもなく、まさに、権力そのものの論理である。国際関係に、平等な平和を築くのではなく、力による外交の正当化である。専制と戦ったといわれるアテナイの自由の旗印が、いまや色あせて見えるのである

#### (4) ギリシアにおける力の思想

力の思想が実際に適応された例を、アテナイに抵抗した二つのポリスをあげて、その実態を調べてみたい。一つはレスボス島のミュティレネ、もう一つはメロス島。アテナイはミュティレネを敗った後、本国において、煽動家の演説によって、全員処刑を民会で決定する。しかし、その翌日、ある市民の全員処刑についての反対演説によって、多くの市民は我にかえり、前日の極悪非道な決定を取り消すのである。そして先の命令の船を追って、第二の船が派遣されるのである。そして、処刑執行の直前に、第二の船が到着し、全員処刑はまぬかれるのである。トゥーキュディデースの「戦史」の最も感動的部分と言ってもいいところである。ところがメロスは、アテナイによって無理強いされた戦争によって、その七百年の歴史を閉じたのであった。戦端が開かれる前の、アテナイの使節とメロス側の交渉の推移とその論理を簡単に見てみよう。

##### アテナイ側

我々が現在ここにきているのはなにも大義名分があるからではない。危害を加えられたから、その報復に來たというような理由を持っていない。同様に、諸君すなわちメロスが中立であり、我々に何の不正も働かなかったことを盾にとって、我々を説得しようとしても、そのような諸君を相手にするつもりも、我々にはまったくない。我々が交渉相手として諸君に期待することは、弱肉強食の原則と客観的人間理性の論理的必然性が正義であるとする原則に則って、双方が希望することを

明示する必要のあることを諸君が知っていることである。

我々がここに来ているのは、我が支配権の利益のためであり、この会談は貴ポリスの存亡を議するためであるという二点を明瞭にしておきたい。苦勞をせずに諸君を支配下におくことが、我々の関心事でありかつ双方に利益をもたらす諸君の安寧さをも希望している。

メロス側

諸君すなわちアテナイの支配に屈することが、どうして我々にとって良いことであろうか。

アテナイ側

つまり諸君は恐ろしい被害を受ける前に投降でき、我々は害なわないで利益を得られるからである。天則とは明らかに自然の法則によって、優者常勝の人道であることを我々は理解しているのである。この法則は、我々が決めたものでもなければ、初めて利用するものでもなく、昔から存在し、永久に受け継がれていくものであって、それに我々は則って行動しているにすぎない。

交渉は決裂し、メロスは勇敢に戦うが、敗れ、全員処刑となり、その歴史は終わるのである。

以上、トゥーキューディデースに見られるように、この強者の思想とも非情の論理ともいえるものが、紀元前五世紀後半のギリシア世界を覆っていたのである。中国の孟子は政治を王道と霸道に分類したが、アテナイの論理はまさに霸道ということが出来る。しかし、アテナイが覇道を歩まざるを得ないところに、すでに凋落の傾向を示しているといわざるを得ない。すぐれた詩人はそのことを直感しているかのようなのである。心あるアテナイ人の一人、エウリーピデースは、このメロスの虐殺に強い衝撃を受けたようである。この事件の後アテナイの暴挙に対し、警告のためか、悲劇「トロイヤーの女たち」を書いたといわれている。彼は劇中、ポセイドンに語らせている、「町を攻略し、神殿や死者たちの聖なる墓所を荒らす人間は愚かだ、次はわが身をほろぼすのであれば。」<sup>(12)</sup>と。また、ヘカベに言わせている、「いまのしあわせがいつまでも続くと思って喜ぶのは愚か者。というのも、運命というものは、気まぐれ者に似て、ここかしこ跳び回るのが流儀なのだから。自分だけでしあわせでありつづけることなど、だれにも叶わないのだ。」<sup>(13)</sup>と。エウリーピデースは、後のアテナイのシシリー遠征が何万もの戦死者をだし、悲惨な失敗に終わるのを予言しているかのごとくである。アテナイの戦争政策と社会の末期的様相に絶望したためか、エウリーピデースは、晩年、高齢にもかかわらず祖国をあとにしているのである。

さて、もう一度、「メロス対談」に戻ってみよう。アテナイ側の思想は、結局のところ、強者が弱者を支配するのは当然のことであり、強者の利益が正義である、といったものであった。

ここにおいて、何ら疑いなく、自由と専制の戦いとして、ペルシア戦争を見ていくことの危うさを我々は知るのである。つまり、東方の専制対ギリシアの自由という単純な二分法で歴史を割り切ってはならないのである。特に授業に立つ教師はこのことを理解しておくべきである。

## (5) 力と正義の闘争

上記を踏まえた上で、同じアテナイ人によって、また、この力の思想が批判されているダイナミクスにも注意を向けなければならない。力と正義の問題を徹底して追求したプラトンの思想とその論理を探り、授業そのものを奥行きのあるものにすることも重要なことと考える。

プラトンは、諸対話篇において、ソクラテスを主人公にして、それぞれのテーマにそって、対話



を進めている。「ゴルギアス」ではカリクレスが、また、「国家」ではトラシュマコスが、強者の論理を展開する。「国家」に登場するトラシュマコスは、正しいこととは強いものの利益にほかならない、と断言し、不正を非難する人間がいるとしても、それは当人が不正を恐れているからではなくて、不正を被ることを恐れているからである、と続ける。「ゴルギアス」においてソクラテスの討論相手となったカリクレスによれば、人に不正を行うほうが、自分が不正を受けるよりも醜いとか、また、平等に持つことが正しくて、他人よりも余計に取るのは不正であるとかいうのは、単に法律慣習（ノモス）の上でのことにすぎないのである。しかし、そのノモスとは世の大多数を占める弱い人間たちが少数の強者に対抗して、自分たちの利益を守るために定めた人為的な約束事にほかならないのである。そして、自然（ピュシス）本来においては、強者が弱者を支配して、弱者よりも余計に取るほうが正しいのである等々と、力こそ正義であるとの論を展開するのである。

「国家」を読み進んでいくと、正義の問題は、トラシュマコスなどが言う、力こそ正義であるとする議論ほどではないが、正義を一種の契約としてみる考え方があらわれるのである。ソクラテスの若き友人の一人であるグラウコンは、正義とは社会関係において、不正を受けながら仕返しをする能力のない者たちが考え出した、侵さず侵されずという妥協案としての契約ではないか、と語るのである。このように、今や、正義という概念は、よくて利害打算、悪ければ、まったくの背徳になってしまうのである。

ギリシアの自由と正義を考えると、上に述べたこと、つまり、力が正義であるとする思想の存在を考慮に入れるならば、無批判に、主情的、感傷的にギリシア礼賛になってはならないのである。ただ、ギリシアの強みは、同じギリシアの伝統を踏む人々の中に、従来の主張の逆である、正義こそは力であるとするを、徹底して追求する思想があったことではなかろうかと考えられる。現実社会において、一種のリアリティを持つ正義は強者の利益であるとする陥穽から、正義を救い出すことが、作中のソクラテス、つまりプラトンの仕事であった。

「国家」にあらわれたソクラテスは、正義とは強者の利益であるというトラシュマコスの説に対して、真っ向からそれを否定するのではなく、その説を前提にして議論をくり返しながら、相手のよって立つ基盤を論理において自己矛盾に陥らせ、掘り崩していくのである。その議論はユーモアとも理解できるが対話者にとっては苛立たしく感じられるものでもあった。その例を見ていきたい。作中のソクラテスは、次のように、語りかけるのである。当時パンクラチオン（今でいうところのK-1であろうか）の有名な力士が、その体の維持のために牛肉を食することは、彼の利益につながっているが、このことは、自分たちのような弱い者にも利益になり、したがって正しいことだね、と。トラシュマコスは、自分の言っている強者は、そんな肉体的な概念ではないという。トラシュマコスによれば、民主制であり、僭主独裁制であり、貴族制でありというように様々な政治形態があるが、それぞれの国で権力を握っているのは、ほかならぬその支配者である。そしてその支配階級はそれぞれ自分の利益にあわせて法律を制定するのである。たとえば、民主制の場合ならば、民衆中心の法律を制定し、僭主独裁制の場合ならば、独裁僭主中心の法律を制定し、貴族制の場合ならば、貴族中心の法律を制定する。そして、そういうふうな法律を制定した上で、自分たちの利益になることこそが被支配者にとっての正義なのだと言明して、これを踏み外したものを法律違反者、不正な犯罪人として懲罰するのである。トラシュマコスは勝ち誇ったかのように続けるのである。

正義とは現存する支配階級の利益になることに他ならない。しかるに支配階級とは権力のある強い者なのだ。したがって、論理的には、強い者の利益になることが正義なのだ、と。それに対して「国家」作中のソクラテスは、相手の主張を敷衍して、強い者の利益が正しいならば、その強い人・支配者に服従することも正義であるということだね、と確認するのである。トラシュマコスはその通りだと答えるのである。ソクラテスはトラシュマコスに、それぞれの種類の国における支配者は絶対に誤ることはないか、それとも時には誤りをおかすこともあるだろうかと問うのである。トラシュマコスは、ときには誤ることもあると答える。ソクラテスは、彼ら支配者は法律を制定する時も、その制定の仕方を間違わない場合と、間違う場合もあるのかと問う。トラシュマコスは、間違うこともあると思うと答える。ソクラテスは、間違わないというのは、自分たちの利益になることを制定することであって、間違うというのは自分たちの不利益なことを制定してしまうことだ。そして支配されるほうは、支配者の制定することは何でも行うことが正しいということだったから、当然の帰結として、強い者の利益になることを行うことだけが正義ではなく、逆に利益にならないことを行うのも正義になるとトラシュマコスの矛盾を追及するのである。

ソクラテスの立場は、論理的な観点より議論を進めているだけではなく、事実問題としても、強者の立場に立つという偶然によって正義というものが決して定立できないということを主張し、正義とは強者、弱者という立場に限定されるものではないことを明らかにしようとしていると考えられる。そして、「ゴルギアス」において、不正を行う人のほうが、不正を受ける人よりも、もっと不幸であるという有名な命題にいたって、正義というものは偶然や功利を超えたものとして、つまり、正義はある意味では、われわれの存在以前に存在するものであるということを提起しようとしたのである。

## おわりに

私の授業に対する態度は、さまざまな歴史についての考え方や感じ方、また、エピソードとして、先人の思想に接することによって、その都度、紆余曲折を経ながら変容してきた。

ここに、いまの私が考えている歴史授業について述べてみたい。歴史の授業をするということは、歴史上の事実、たとえばペルシア戦争開始より始まる前五世紀、それに関して、ギリシアを礼賛することではない。また、二つの勢力が早晚衝突することは必然であったとする硬直した見方をも排し、そこに関わった人々、例をあげるとすれば、歴史家、悲劇作家や哲学者の考え方、生き方、あり方を視野に入れ、生徒自身の生活を、過去からつながる現実との関わりで、とらえさせることである。換言すれば、それは歴史を単に、物理的な時間軸上の史実の堆積としてのみ見るのではない。空間的な広がりを持ち、哲学や文化人類学の成果を取り入れ、人類の全体としての歩みを知り、未来を見とおすことである。

生徒たちに、歴史を重層的・双方向的に理解させること、また、各地域にはそれぞれの独自性、つまり世界には様々な価値があり、それぞれのものが、人類の遺産であることを学習させると同時に、ひいてはそこに暮らす人々の喜びや楽しみ、怒りや悲しみにも、思いを抱かせ、加えて、生徒各自がこれからの人生において、出会う様々な局面において自ら意思決定ができるような歴史授業を私は考

えているのである。

- (1) ヘーゲル、長谷川宏訳「歴史哲学講義」岩波文庫 平成6年 p.36.
- (2) ヘーゲル 前掲書 p.39.
- (3) ヘーゲル 前掲書 p.39～40.
- (4) ヘーゲル 前掲書 p.60.
- (5) ヘーゲル 前掲書 p.63.
- (6) 小林秀雄全集7巻所収「歴史と文学」新潮社 昭和43年 p.206～207.
- (7) クローチェ、羽仁五郎訳「歴史の理論と歴史」岩波文庫 昭和27年 p.17.
- (8) クローチェ 前掲書 p.17.
- (9) 学習指導要領 文部省 平成11年
- (10) トゥーキュディデース、久保正彰訳「戦史」岩波文庫 昭和41年 p.226.
- (11) トゥーキュディデース 前掲書 p.249.
- (12) エウリーピデース、水谷智洋訳 ギリシア悲劇全集7巻「トロイヤーの女たち」岩波書店 平成3年 p.126
- (13) エウリーピデース 前掲書 p.196